

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16684

研究課題名(和文)古今伝授史における神道的要素

研究課題名(英文)Shinto elements in the history of Kokindenju

研究代表者

竹島 一希 (TAKESHIMA, Kazuki)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・准教授

研究者番号：10733991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：東常縁筆『大中臣祓』(神宮文庫蔵)は両部神道の秘伝書である。常縁が讃岐国賢円から本書を伝授したのは、常縁が和歌の師である堯孝から古今伝授をしているのとちょうど同時期である。すなわち、常縁は、伝授中の古今伝授を補うものとして、両部神道に関する知識を増やそうと努めていた。さらに、『大中臣祓』中の清浄偈は、切紙の形に改められ、常縁の手によって古今伝授の中に組み込まれていた。ここで両部神道色の強まった古今伝授は、次の世代の「当流切紙」においては吉田神道によって塗り替えられていた。

研究成果の概要(英文)："Ohnakatomiharae"(Jingubunko Collection), which is copied by Tono Tsuneyori, is a book of secrets in Ryobu Shinto. It was exactly the same time that Tsuneyori was instructed this book from Kenen living in Sanuki, as instructed Kokindenju from Gyoko who was his teacher of Waka. In other words, Tsuneyori tried increasing his knowledge about Ryobu Shinto in order to improve his Kokindenju. After that, Tsuneyori arranged "Seijoge" in "Ohnakatomiharae" for Kokindenju. But in "Toryukirigami", which was used in Kokindenju about 150 years later from Tsuneyori, someone altered Ryobu Shinto elements to Yoshida Shinto.

研究分野：日本中世文学

キーワード：古今伝授 神道 東常縁 宗祇 吉田神道

1. 研究開始当初の背景

『古今集』の中に含まれるとされる秘事を解き明かし、それを秘伝として師資相承する古今伝授は、おおよそ鎌倉期に誕生した。多くの流派が生み出されたが、最も本流と言われるものが、東常縁から宗祇へと伝わった流派である(常縁・宗祇流)。

中世、近世における各分野に対する強い影響力に比して、近代ではその牽強付会ぶりばかりが目され、学問の対象とされることはほとんどなかった。とはいえ、横井金男『古今伝授の史的研究』(臨川書店・1980年)、三輪正胤『歌学秘伝の研究』(風間書房・1994年)が刊行され、古今伝授研究に画期的な進展が見られた。特に三輪は、古今伝授の三木三鳥伝を分析することを通して、その思想史的背景を明らかにしようとした。三輪によれば、常縁・宗祇流に至って、古今伝授は単なる和歌に関する知識の伝授から、為政者に必須の教養となったのである。

ここで問題となるのは、『古今集』に対するこのような政教主義的な解釈の端緒である。常縁・宗祇流の政教主義をめぐっては、片桐洋一『中世古今集注釈書解題』(赤尾照文堂)や三輪の指摘があったが、それ以上の追究は行われなかった。政教主義的解釈を始めたのが常縁なのか、宗祇なのか、或いは常縁の師である堯孝なのか、具体的な検討に行き詰まりが生じていたのである。

それを打開したのが、長谷川千尋「東常縁の歌学における常光院流の継承」(日下幸男編『中世近世和歌文芸論集』思文閣出版・2008年)である。長谷川は、『古今集両度聞書』(常縁・宗祇)や常縁周辺の古今伝授を調べ上げ、堯孝・常縁・宗祇の各段階で伝授内容の違いはないこと、また宗祇・三条西実隆においても同様であることを明らかにした。従来、常縁以前の古今伝授の内容や常縁前後の古今伝授の変化(宗祇の果たした役割)を具体的に捉えることができなかったが、これらの問題を一気に解決することになった。常縁・宗祇流に特有の政教主義的解釈や古今伝授切紙も、堯孝・常縁・宗祇・実隆の間では不変であったのである。

ここで新たに浮かび上がるのが、古今伝授の宗教的・思想的側面である。堯孝流は、堯孝・常縁・宗祇流と、堯孝・堯恵流とに分かれるが、堯孝を同じく継承したはずの両流は、その教説、注釈スタイルにおいて著しい相違を見せる。このことに関して、新井栄蔵「古今伝授の再検討 宗祇流・堯恵流の三木伝を中心として」(『文学』45・9・1977年)は、堯恵が白山信仰に深い関わりを持つこと、宗祇が吉田兼俱から神道伝授を受けたことに着目する。そこから、堯恵流は天台宗の、常縁・宗祇流は吉田神道の影響を強く受けた故に、両流の差が生まれたと考えた。両流の宗教的背景の相違が、注釈・伝授内容の相違に反映していると見たのである。だが長谷川が

指摘した通り、常縁・宗祇流が堯孝流のままであるなら、新井説は成り立たない。何故なら、吉田神道が確立したのは、堯孝の死後だからである。

とはいえ、古今伝授の注説の背景に宗教的基盤を見出す考え自体は正しいと思われる。『両度聞書』にせよ、古今伝授切紙にせよ、それが宗教的な彩りを持つことは、一読すれば直ちに理解できるからである。

2. 研究の目的

そこで本研究は、新井説の再検討を目的に据え、テーマを「古今伝授史における神道的要素」と設定した。古今伝授が成立した鎌倉期以来、神道の主流派は、山王神道から両部神道へ、さらに伊勢神道、吉田神道というように移り変わっていった。それに呼応するように、古今伝授もその時々思潮を巧みに取り入れる一方、古い思潮を捨て去ることはせず、徐々に堆積させて、一枚の布に織りなしていった。本研究は特に常縁・宗祇流に焦点を絞り、その背景にある神道流派を見極めることで、堯孝を遡る神道説がどの程度常縁・宗祇流に残っているのかを考える。

3. 研究の方法

本研究は大きく二つの手順を経る。

(1) 堯孝・常縁・宗祇の各段階における古今伝授の明確化

第一の手順は、常縁・宗祇流の古今伝授を調査する。常縁三男の素純編『古今秘伝集』(宮内庁書陵部・鷹380)とその異本である『詠歌口伝書類』(鶴見大学蔵)とに見える東家説を主軸に、堯孝・常縁・宗祇の各段階における古今伝授を確定する。『古今秘伝集』は、堯孝から受けた説、また東家伝来の説の集成した秘伝書である。近年、伊倉史人「鶴見大学図書館蔵『詠歌口伝書類』解題・翻刻」(『国文学叢録 論考と資料』笠間書院・2014年)で異本が翻刻され、二本の比較が容易になった。その上で、宗祇が実隆に伝授した早稲田大学蔵『古今伝授書』(『中世歌書集』早稲田大学出版部・1987年)と比較すれば、堯孝・常縁・宗祇の各段階における古今伝授を明確化できるだろう。

(2) (1)の神道史における位置付け

第二の手順は、(1)で明らかになった各段階における古今伝授を神道史から見直す。具体的には、神道諸派のテキストを参照して、古今伝授の重要概念の変遷を跡づける。

神道諸派のテキストは、神道大系や『度会神道大成』(大神宮叢書)『吉田叢書』(第一編～第五編)などの、神道研究の蓄積を参照する。中でも注意したいのは、伊藤正義「中

世日本紀の輪郭 太平記における卜部兼員説をめぐって」(「文学」40・12・1972年)が名付けた中世日本紀である。原典の『日本書紀』には存在しない創作説話も、中世では大きく『日本書紀』と呼ばれていた。『古今集』仮名序で、国の始発と和歌の始発とを重ねることから、古今伝授切紙にも『日本書紀』中世日本紀の影響が強い。これらにも目を配りながら、古今伝授切紙の解明を目指す。

4. 研究成果

研究成果は大きく二つに分かれる。

(1) 東常縁『大中臣祓』をめぐって

まず、東常縁関係の資料を収集し、研究対象を明確化することから始めた。先行研究で東家流の古今伝授資料とされている資料には、『古今涇渭鈔』(常縁 東氏胤)、『古今秘伝集』(常縁 東頼数 東素純)の両注釈書があるが、さらに今回、従来ほとんど知られていなかった資料が判明した。神宮文庫『大中臣祓』(『神宮儀式 中臣祓』皇学館大学・1983年)である。奥書によれば、享徳三年(1454)に讃岐国石川郷金光寺の賢円が常縁に伝授したものである。本書は享徳三年二月二十五日、また八月三日の二度に渡った伝授は、「秘曲」(初度奥書)、「秘中極秘」(二度奥書)というように、秘伝のレベルを上げたものであった。

『大中臣祓』は、奥書など計七項目から成る。なかでも、中臣祓、七ヶ大事、清浄偈が重要な秘伝である。

中臣祓

中臣祓とは、古代中臣氏が唱えた大祓詞を改変したものである。中臣祓は漢文で書かれているため、その訓じ方が秘伝とされ、神道諸流で異なっていた。神道諸流の訓法と比較したところ、『大中臣祓』所収の中臣祓の訓は神祇官流という古い型を伝えていることが判明した。しかし一方、『大中臣祓』に掲げられる略祓は陰陽師流や伊勢流の本文を持つ。すなわち、『大中臣祓』の祓詞では古い型と新しい型が並列されているのである。

七ヶ大事

この項目には、智拳印以下七つの印明が掲げられる。この七印明は、両部神道の一流派である三輪神道の切紙「次神祇参詣七種秘印付触穢」(永正七 一五一〇年伝授「日本紀一流之大事」所収。『真言神道(下)』神道大系・1992年)にも同じ順序で掲載される。この項目は、両部神道の秘伝に近いものと見て良い。

清浄偈

清浄偈とは、「白衆等各念」以下、六つの五言句で構成される偈である。清浄偈も中臣

祓同様、その訓法が問題となるが、『大中臣祓』における訓法は、従来紹介されている清浄偈の訓法と一致しない。すなわち、その訓法から神道の流派を推測することは困難であるが、清浄偈そのものは特に伊勢流の秘伝として重視された。

以上より、 は伊勢流、 は両部神道となるが、伊勢流とはいわゆる伊勢神道とは関係が薄く、仏典や偈、両部神道の秘伝書等を含みこんだ祓の一流派である。つまり、 、 とも大きく両部神道の範疇にあることになり、常縁が熱心に伝受した『大中臣祓』は両部神道に属していたと考えられる。

さらに、『大中臣祓』所収の と同文が、古今伝授切紙のうち、東家流切紙群と呼称される一群の切紙の「中」切紙に相当することが分かった(『古今伝授書』常縁 宗祇。『中世歌書集』)。この「中」切紙は、東家流切紙群の末尾にあり、古今伝授切紙全体の奥秘の位置にある。常縁は自らの古今伝授を両部神道によって基礎付けようとしていたことが知られる。これは、常縁が堯孝より伝受した方向性を、より強めるような形で発展であったらう。

(2) 三条西家の古今伝授について

(2)は、「中」切紙、三条西家古今集注釈書集成の二つに分かれる。

「中」切紙

先の「中」切紙は、「当流切紙」(『古今切紙集』臨川書店・1983年)においても、やはり奥秘の位置を占めている。「当流切紙」とは、三条西実枝が細川幽斎へと伝授したもので、それ以後の御所伝授、地下伝授の基礎となった重要な伝授切紙である。「当流切紙」の「中」切紙を、先の常縁 宗祇段階の「中」切紙と比較すれば、「当流切紙」の「中」切紙には「目二諸ノ不浄ヲ見テ……」という一文が加わっている。この文は吉田兼俱「六根清浄大祓」の一節であるから、「当流切紙」においては吉田神道がその思想的基盤となっていることが知られるのである。すなわち、実隆、公条、実枝の三条西家三代のうちに、古今伝授の思想的基盤が、両部神道から吉田神道へと改まっていることが分かる。

三条西家古今集注釈書集成

で指摘したように、三条西家三代(実隆・公条・実枝)のどこかで古今伝授に変更が加えられたのだが、それが誰の段階なのかは未詳である。『古今集』注釈書で残るものは、『両度聞書』(常縁 宗祇)、『伝心抄』(実枝 幽斎)伝授切紙で残るものは『古今伝授書』(常縁 宗祇 実隆)、「当流切紙」(実枝 幽斎)という具合に、実隆 公条 実枝の段階を示す注釈書や切紙はミッシングリンクになっているからである。ただ、ヒントになる可能性があるのは、三条西家古今集注

積書集成である。

武井和人「三條西家古今学沿革資料襍攷
実隆・公条・実枝」(『中世和歌の文献学
的研究』笠間書院・1989年)は、

東京大学蔵『古今集聞書』(『古今和歌集
注抄出・古今和歌集聞書』汲古書院・
1985年)

宮内庁書陵部蔵『古今集聞書』(日・51)
広島大学蔵『古今集真名序注』(国文(N)
2341)

の三本はもとは一具をなし、三條西家三代に
渡る注釈活動の精髓であることを指摘した。

から全体で三條西家古今集注釈書集成
と呼ぶ。今回の調査で、とは原本を閲覧
し、の紙焼き複製、の画像を入手した。

これらを細かく調査すると、幾つか興味深
い点が判明した。

(ア)本文の構成等、からは共通性が
明確に看取できる。その一方で、の
み小字片仮名注が少ないなどの差を
見出すこともできる。

(イ)本文は主に『両度聞書』(常縁 宗祇)
『古聞』(宗祇 肖柏)の引用から成
り、三條西家独自の追加はそれほど多
くはない。それら追加も、他の注釈書
などの典拠を指摘できるものがあり、
三條西家古今集注釈書集成は常縁・宗
祇流の注釈書の抜書集成であると結
論して良いだろう。

(ウ)(イ)のため、三條西家古今集注釈書
集成の注説に、吉田神道の影響は見ら
れない。それは、『両度聞書』『古聞』
に吉田神道の影響が及んでいないこ
との反映である。

以上、三條西家古今集注釈書集成を見る限り、
吉田神道の影響が及んでいるとは考えられ
ない。しかし、先述した「当流切紙」と吉田
神道との関係を鑑みれば、なお考察が必要で
あろう。今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

竹島一希「東家流の神道」『国語国文』、査読
有、第86巻第4号、2017年4月、228 - 240
頁

〔学会発表〕(計1件)

竹島一希「東家流古今集注釈」平成27年度
熊本国語国文学会、2015年12月12日、熊
本県立大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹島 一希 (TAKESHIMA, Kazuki)

熊本大学・大学院人文社会科学部

(文)・准教授

研究者番号：10733991